教員紹介

今回は、グローバルリーダーシップ研究所の本林響子先生をご紹介します。本林先生のご所属は、学部では文教育学部言語文化学科、大学院では比較社会文化学専攻日本語教育コースです。

人の国際移動という現象を中心に、言葉と社会について考えています

Kyoko Motobayashi
本林　響子

Q1 ご経歴についてお聞かせください。

私はお茶大の卒業生で、学部では文教育学部の日本語・日本文学コースで勉強し、大学院では日本語教育の修士課程を修了しました。その後カナダのトロント大学に留学し、修士号と博士号を取得して、2015年の夏に帰国してお茶大に着任しました。

学部時代は中世文学のゼミにいたのですが、大学3年生の夏に文部科学省のインターンシップに参加し、それをきっかけに現在の研究分野に関心を持ち始めました。大学院で勉強するうちに、修士論文で扱ったバイリンガル教育の理論に特に興味を惹かれまして、それがカナダのトロント大学の先生が提唱されたものとわかり、思い切ってトロント大学に留学することにしたのです。

トロント大学では、分野を牽引する先生方が研究を「論文化」する前のダイナミックで生き生きとした議論に触れられる喜びが大きく、「今、目の前で次々と『知』が紡ぎ出されている」という感慨を何度も持ちました。指導教官にも大変恵まれて、色々な意味で大きく影響を受けたと感じています。

Q2 どのような研究をなさっているのですか。なぜそのような研究をされているのでしょうか。

専門は社会言語学という分野ですが、特に相互行為とそれを取り巻く社会的文脈の関係性に関心を持っています。人が言葉を使ってどのように「意味」と「しくみ」を作り上げているのか、ということですが、ミクロな相互行為とマクロな社会制度の双方に着目して研究しています。

特に関心があるのは「人の国際移動」という文脈に関連する言語の問題です。現在、言語的他者との出会いの場面、いわゆる「接触場面」における意味の構築やそれを取り巻く社会制度について研究しています。その場面では複数の言語が飛び交うことも多いですし、使用する言語の種類自体が社会的な意味を持つこともあります。複数の言語があれば力関係も存在しますし、そこに至る歴史性もある。バイリンガリズムや言語の切り替えが社会的な意味合いを持つことも多く、過去の関心ともつながっていて、大変興味深く感じています。

Q3 カナダに留学されていたとのことですが、カナダでの生活はいかがでしたか。

トロント大学で過ごした時間は自分の財産で、得たものは計り知れません。研究については、世界中から優秀な方が集まっていてとても刺激的な場所で、20代から30代にかけてトロントで勉強に没頭できたことは、大変幸せだったと思っています。

博士課程在籍中に、トロントで上の子を出産したのですが、子どもを通して社会とのつながりが非常に豊かになったのも良かったと思っています。博士課程の同期には同じくらいの歳の子どもがいる人も多く、助け合っていました。みな大学院生で、集まるとつい研究の話になり、子どもを抱っこしながら論文の話をしたり。同じ頃に博士号を取得していて、今でも学会などで会いますし、よき仲間という感じがします。

Q4 お茶大に戻っていらして、お茶大生にどのような印象を持たれましたか。また学生のみなさんへのメッセージをお願いします。

お茶大に教員として着任して、そうそうこんな感じだったと懐かしく思うことも多くありました。授業でも、思慮深く丁寧で上品な雰囲気を醸しつつ、鋭い視点で切り込んでくれるという、多面的な面白さは変わらないと思います。

大学時代は色々な人と出会い、多様な経験ができる貴重な時期だと思います。いろいろなものに触れ、吸収しようとしているうちに、自分らしい視点や独自性が生まれるのではないかなと思います。その原動力となるのは好奇心だと思いますので、皆さんも好奇心に蓋をせず、色々なことに挑戦してほしいと思います。

そして、自分が夢中になれるもの、自分の軸となるようなものを見つけてほしいですね。私の場合は高校卒業の頃から、言葉に関わる仕事をしていくのかなと思っていたのですが、結局これまで言葉というものから離れることがありませんでした。学ぶほどに奥深さが分かり、学ぶべきこと、考えるべきことは尽きないと感じています。同時に最近では、あるテーマを深めることで他のことにも応用がきき、対話が広がったりすることを実感しています。皆さんも是非、自分の軸となるものについて考えてみてください。

文責：基幹研究院人文科学系准教授
山腰　京子